114
A 670
2

大正十一年四月
大隈侯爵邸ヨリ贈

ヲリヤン氏ノ北征紀行第一編ノ抄譯

一、百五十一十月十六日ニ於テ支那ノ二官一隊ノ小吏ヲ率ヰテ既ニ十八日以前香港ニ於テ確定セル規則ニ從テ船目錄セシ「ドルチヤ」船「アルロウ」号ノ船中ニ侵入シテ其旗章ヲ裂キ棄テ且ツ其船將或ハ領事官ノ議論ヲ聽キ入レス飽マテ其船ノ英船ニアラスシテ支那船タルヿヲ主張シ以テ其船中ヨリ支那ノ水夫ヲ捕ヘ去リシヿアリ蓋シ其船牌ハ當時尚ホ領事館中ニ在リシカニ既ニ一月余前ニ其期限過ヘ去リシヲ以テ此擧動ニ及ヒシモノヽ如シ然リ

ト雖モ其目録ノ期限過キ去ルノ日以來ハ其
船藩屬地ノ海中ニ在ラサリシニ因リパーク
ス氏ハ飽マテ上文ノ規則中第十章ニ照準シテ
之ヲ訟論スルノ權アルヿヲ思想シ直チニ委員
エル氏ニ書翰ヲ授シテ其暴挙ヲ訴ヘ且ツ其捕獲
セラレタル水夫等ニ訟事アラハ自カラ之ヲ糺
明スヘキヿヲ云ヒ送リ又ソルシヨンホーリング
氏及ヒ海軍尤功ノ士水師提督イルヨット氏ニ其
各事ヲ告知セリ是ニ於テエル氏パークス氏ニ答書
ヲ送リテ飽ノ「ドルチヤ」船ヲ其船ノ為ス

ヘカラサルヿヲ之ヘ且ツ其数名ノ水夫ノ每ヒ
タルヲ免レサルヿヲ主張セリ且ツ九人ノ者ヲ
ハ送リ返サント申出タリサレトモパークス氏
ハエル氏ヨリ此捕ヘラレタル支那人ヲ其船ニ送
リ帰ス由ノ言譯書付ヲ求メ且領事官ヨリ引渡
サルヽナラハ官府ヘ引渡スヘキヿヲ求ム可
旨ヲ諭示サレタリエル氏其答ニ猶確守シテ云フ
此「ドルチヤ」船ハ外國人ノ所有物ニ非ラス嘗テ
船籍ヲ掲ケスト且約シ言フ支那官員ハ決シテ
外國人ノ「ドルチヤ」船ヲ禁留ス可カラスト又等

ノ云フ外國人ヨリ支那人民ノ建造セシ船ニ付
目録ヲ賣ル可カラスト云ヘリ是時ニ當テソル、
ジョンボーリング氏ヨリハ海軍局ヘ願書ヲ呈シ
テ此委員ヲ脅迫シ且此船元ト皇帝ノ船ト思ハ
レタルカ其後商船ナルヿ明白ナリシ者ナレハ
返方ノ仕方ニテ取リ且ツ縱還セシ者ナリト云
ヘリ十月十五日ニパークス氏ヨリ卫氏ニ此捕
留ノ由ヲ告ケ知ラセ且海軍ノ兵パルリール、
フォーツニ駐在セル由ヲ告ケタリ同月二十一日
パークス氏ヨリ受ケ卫氏ニ諭シ云フ今朝

フ所ノ事若シ
ハ別ニ他ノ處置ヲ爲ス可シト云ヘリ
十四時間ノ内ニ許諾セラレ
此脅迫ノ故ニ因テ約定時間ノ尽キントスル一
時前ニ十二人ヲ領事官ノ居館ヘ送リ返ヘシタ
リ然レトモ上官員ノ附キ来ルヿモ無ク又言譯
ノ書狀モ無カリキパークス氏再ヒ卫氏ニ書狀
ヲ送レリ諸事決セザルヲ以テ同氏ヨリ同月二十一
日ノ決案ヲ各國ノ同職ニ通達セシ然ル所同日ニ
卫氏前論ヲ主張シテ商用「ジョンク」船拿ニ就キテ
辨駁セル書簡ヲ送レリ以テ同月二十二日

ハートクス氏此書簡ノ答ヲ送リ又同日ノ夕刻ニ
同氏ヨリ今此事件ハ英國上等海軍士官ニ干スル旨
ヲ列氏ニ通達シ之ヨリシテ同事件ニ就キテノ書簡ハ
立氏トソルジョン、ボーリングノ間ニ往復シ直チニソ
ルジョンボーリングトアドミラルト評議ヲナシ之
ヲ所置スルノ善法ハ廣東府ノ要害ヲ奪有シテ強償ト
ナスヲ上策トスト議決シ同月二十三日アドミラルセーモ
ールバルリールフレミールヤカヲ等ノ城砦ヲ攻略シ
然ル後チ此領事官ニ依テセーモール當地ニ著
シ償ヲ請ケ[illegible]ノ尚オ城砦公署公船ヲ奪原

ス可キ旨ヲ通セリ然ルニ同氏此旨ヲ
ニ同意セザルヲ以テ翌日「ゼルチ子スト」号船及
クサミーン砦ヲ奪ヒ而ノ居留地ノ商館防禦ノ
人數ヲ配レリ又亜國ノ為メニ亜國ノ士官水夫、
海兵防禦ノ備ヲナセリ
廿五日ニタッチホリーノ島及ビ臺場ヲ攻メ取
リ敵ノ防戦スルヿナク之ヲ畧セシカ是ニ日ノ
從夷ノ業ヲ全成シ文武ノ官吏ハ其業ノ功績ア
ル可キヲ信頼セシカ如シ然レトモ終ニ其功績ヲ
得ル能ハスシテ水師提督ノ書簡ニ左ノ文言ノ載セリ

都府ノ要害ハ我カ兵者ノ攻メ取リタル
予謂ラク委員ハ平伏ノ已ニヲ得サル旨ヲ解
ス可ク曰テ予パークス氏ニ命シ委員閣下幷
紙ノ箇條ヲ満足ニ決定セント欲セハ予更ニ
攻撃ヲ為サヽル可キ旨ノ右委員ニ言ヒ送ラ
シメシカ其答詞予カ期望スルカ如ノナラス
云シ

千八百五十四年十一月十四日

備委員ハ平伏スルヲナノ却テ十二時三十分ニ
一隊ノ軍ノ攻撃ヲ為サシメ又其後面ノ

街ニ拠リシ大望ヲ以テ其攻撃ノ應援ヲ為サシ
ム然ルニ領事官パークス氏当時其場所ニ居合
セ其軍ヲ退ク可キ旨ヲ説キタレ氏其言用ヒラ
レス此ニ於テカピテイン ペンロースノ指揮セ
シ海兵ヲ以テ攻撃ノ軍ヲ追却セシメシカ当時
死傷十四名アリト云フ翌日委員エー氏支那ノ
運上所ヲ鎖シタリ
右ノ即チ委員ヲシテ名誉アル賠償ヲ為サシメ
ント無益ニ計リタルニ曰リ行ヒシ所ノ暴烈ノ
処置ニシテ右委員ニ抗ス可

キ威権アルヿ既明白トナリ又我等ノ其要需ノ
実際ニ施行スルカナキヿ亦明白トナレリ然レ
ドモ七日水師提督ヨリエー氏ニ更ニ書簡ヲ贈
リシカ其要畧ニ云ク予ハ当今ヲハテ是迄久シ
ク違背セシ條約ノ義務ヲ尽ス可キ好機會タリ
ト思フニ付キソルションボーリング氏ト同意シ
原来ノ求需ノ外更ニ左ノ報告ヲ為ス可キ旨ノ
パーソス氏ニ指揮シタリ

此一層ノ要求中ニハ総ヘテ外國ノ代理人等ノ
自由ニ廣東ノ有司ニ接シ其府ニ入ルヘキ権ヲ
含有セリ是マテハ其論只道理ヲ説クニ止マリ
支那政府ノ事情ニ隨ヒ(支那ノ事)和ルヲ(取)ヲ(ナ)ル権ヲ拒
ミシナリ支那ノ役人如何ニ頑固ナリト雖モ此
事ニ就キ疑惑ヲ抱キ斯ク容易ナル進許ヲ以テ
平穏無事ヲ買フヿヲ意ヲ生スヘカリシニ平生ニ
似ス柔弱ノ心頓ニ去リ要事上ノ堂々タル議論
ヲ起シ其祖先ヲ戦勝ヲテ名誉ヲ得タル昔日ノ
雄苦ヲ説キ加之斯ク忍テニ其論ノ変シタルヲ

リ支那人ノ猜疑多キ性質ヲ挑起シ我等ノ思フ所ト相反スル決定ヲ為シタリ然レトモ是亦異ム足ラサルナリ即チ其廣東人ニ布告シタル文中ニ其決定ヲ述フ曰ク

英夷詐偽ノ口実ヲ以テ乱ヲ起ス其意実ハ廣東府ニ入ラント欲スルニ在リ故ニ総督千八百四十九年廣東全省ノ人一和シテ之ヲ拒ムト称シ断然其請ニ應セス兵船ヲ向ケ悪意ヲ逞クセント欲セハ宜シク之ヲ為スヘシトイヒ次テエー

ハ満州辯ノ傲慢頑固三枚重ノ甲冑ニ其身ヲ固メ已レカ威権ノ本城ニ立籠リタリシカ十四ケ月ノ後ニ至リ我等之ヲ其巣窟ヨリ堀出セリ扨エー我最後ノ書ニ答ヘサルヲ以テ午後一時ニ「インカウンタル」号船ノ十インチ口径ピボットト砲ヲ以テ其館ヲ砲撃シ五分時乃至十分時間ヲ置テ日没マテ頻ニ射撃シ「バルラコンタ」号船モ同ク「ジュルブルクリーキ」ノ後ニ據リテ府後ガワ巷裏手ノ山上ニ在ル兵ヲ砲撃シケリ是ニ於テエー令シテ下セシ英夷一人ノ頭ヲ得ル者ハ三十弗ノ賞ヲ與ヘント云ヘリ翌日諭シテ人ヲ去

ラシメ午時ヨリ日没マテ徐々ニ和蘭ノ「ホルリ
ート」相對スル家ヲ砲撃シケリ衙門ハ河岸ヲ距
ルコト百五十ヤードノ處ニ在リケルカ二十九日
午後此處ニ一條ノ通路ヲ開キ水兵及ヒ緑衣隊
ブリウジヤケツトヲ率ヒテ船將自ラ陸シケルニ支那
人少防戦シ我兵死スル者三人傷ツク者十一人
アリ次テ三日ノ間断エス府中ヲ砲撃シ故ラニ
之ヲ毀チタルニハ非サレトモ外郭為ニ多クハ
破レタリ十一月一日船將又エーニ書ヲ贈リシ
カエー答書シテ屈セス自カラ守ルト云フナレ
トモ船將前書ノ要旨ヲ抄摘シテ更ニ一書ヲ贈
レリ

是ニ於テ船將更ニ攻撃ヲ初メ支那人ノ家数戸
ヲ倒シ以テ兵舎ノ地ヲ固メ数日ノ間断エス徐
々ニ官舎ヲ砲撃ス其間ニ「バルラコンタ」船ハフ
ランスノ「ホルリ」ヲ取リ二十三隻ノ兵船ヲ破
却シ我兵一人死シ四人傷ツケリ是ニ至テ又書
ヲ送リケルニエー其要書送リテ止メサルヲ以
テ少ク我ヲ信スルヲ如シ其故ハ對フレ所簡短
ニシテ断然開城退去ノ方策ヲ為セハメリ扨元

未陸兵モ船隊モ我ニ抗スルニ足ル者ナキカ故
エトノ戰ヲ為スヤ無謀無法ニシテ徒僥倖ヲ希
フヌミナルカ我船艦河中ニ在ル者辛シテ火筏
ノ燒打ヲ免レ又夜襲ニ遇ヒ蒸氣船ノ往
来スル者モ砲擊ニ遇ヒ外國ノ船ハ彼此
ノ差別メク咎ニバルソール砦ヨリ亜墨
利加國旅ニ對シ砲擊シテ不敬ヲ加フル
ニ至リケレハ合衆國海軍ノコンマンド
ル、アームストロン氏其報トシテ砦ヲ
奪テ之ヲ毀チ事茲ニ止ミケリバーケル

氏ハ國旗ニ對シ辱ヲ與ヘタルハ既ニ之カ
報ヲ為セリト為シ其後暫クシテエ|ニ書ヲ
贈テ談判ニ及ヒタリ
抑事情ハ相似タレトモ我為ス所ト合衆國ノ
為ス所ト右ノ如ク相反スル所以ハ別ニ其解ヲ
為スヘキナリ
扨其間ニ我等ハ「ボーグ」砦ヲ破リハウクハ及ヒ

他ノ有名ノ人等書信ヲ以テ應接シ蓋シシュル、
ジョン、バウリン及ヒ船將シグマウル巻書ヲ為
シ十七日シュルジョン廣東ニ來リ十八日エー
ト應接ニ及ヒ(千八百五十六年十一月二十四日)
船將之ニ謂テ曰ク我等和蘭ノ「ホルリー」ヲ砲擊
シケレトモ午時ニ之ヲ止メテ嚮ニシュルジョ
ン、バウリンヨリ書ヲ贈リ府ノ長官ト會議セン
ト欲スルノ意ヲ告ケタルノ巻ヲ待テリト且ツ
曰ク若シ其時長官ト相見ルヿヲ得タルナラハ
敵對ヲヤヲ止メント説諭スル意ナリシニ其翌

日會見ヲ辞スルノ巻書來レリ而シテ醜夷ノ一
首級ヲ得ル者ハ賞スルニ三十「テール」ヲ以テセ
シ者增シテ一百「テール」ニ至レリ二十二日フラ
シスノ國旗廣東ニ飜リメリ
支那人再ヒフランスノ「ホルリー」ヲ取テ之ヲ守
リシヲ十二月四日更ニ奪ヒ返シ死者二人傷者
數人アリ其翌日水夫水兵各一人支那人ニ殺サ
レタリ此時猶折々霰彈ヲ府中ニ放チケルカ十
四日船將其功將ニ成ラントト語リケルカ翌日支
那ノ放火者外國商館ヲ盡ク燒キケレハ(千八百

五十六年十二月二十九日船將書ヲ贈テ曰ク廣東ヲ去ルヘカラサルハ固ヨリ明ニシテ礼拜堂ト兵舍ト猶存セリ我意ヲ決シテ商館ノ一園囿ニ入ラントヲ是ニ於テ十七日船將自ラ園囿ニ進ミ三百人ノ勢ヲ以テ其地ニ陣セリ二日大ニカヲ得テ自家ノ風ニテ戰ヲ挑ミ其猛勢日日ニ倍シ二十三日ニストルコウプルウハンボアヨリ誘拐セラレ三十日乘組ノ支那人郵便蒸氣「ジストル」号船ヲ奪取リ十一人ヲ殺シ其頭ヲ斬テ持シ去リ又香港ニ對スル地方ニテハ居留地ニ物ヲ輸スルノ禁アリ又他ノ地方ノ官人ハ令ヲ下シテ外國人ニ雇ハルヽ者ヲ辞シ去ラシメ交易ヲ禁シ賞ヲ懸ケテ頭ヲ募ルノ令ヲ揭示セリ一月四日支那人瑪港ノ兵船ヲ襲擊シ近隣渡頭ニ於テ小船ヲ沉没セシメ水雷火ノ機ヲ以テ殆ト我一船ヲ覆サントセリ十二日敵兵我拠ル所ノ商館園囿ニ迫ルヲ以テ兵舍ノ左右外郭ヲ燒拂ヒケル時ニ第五十六番一隊府郭ニ近ツキケルヲ擊テ之ヲ退ケ死亡アリ然ルニ千八百五十七年一月十四日船將急ニ意ヲ決シ商館園囿

ト和蘭ノ「ホルリ」山ヲ棄テ退キテ烏巣砦ト瑪港
砦ヲ保チ使ヲ馳セテ印度ノ總督ニ五千ノ援兵
ヲ請ヒケルヲ次テ又其他日進取ノ根拠ト為サ
ント欲シタル烏巣砦モ保ツ能ハサルヲ見テ千
八百五十七年一月三十日守兵ヲ撤シ独瑪港砦
ヲ保チシカ猶且ツ一時ハ全ク河ヲ棄テ將ニ守
ラサラントスルニ至ルヿアリテ勸者頻リテ是
麦ヲアトミラルニ迫メタリシカ幸ニシテ猶大
胆ノ所置ヲ決シ清國人挑ヤ(臺湾ニカヒテイヒハツテカ挑撥セル)瑪港ノ武カ守兵
ヲ襲フト雖モ叛黨南後清國人ノ手ニヨリテ敗
ヲ受ケシヿナカリシナリ然ルニ香港ニアル外

國人ヲ海殺スルノ企アレリ

此ノ簡畧ナル説話ニヨレハ一千八百五十七年
第二月ノ初旬ニ於テ支那南方ノ戰爭及ヒ談判
ノ事如何ニ成リ行キシヤ預メ測リ知ルニ足ル
ベキナリ蓋シ其後幾ド四箇月ヲ經テ我軍ノ始
メテコヽニ着セシ迫テハ戰爭談判共ニ両ナガ
ラ変ハリシ事ナク談判ハ中絶シテ止ミ戰爭ハ
仍リ其起リ初メニ異ナラザル理屈ニ因リテ之
ヲ續ケシノミ支那人ハ常ニ人ヲ匂(カドアク)奪ヽヲ暗
殺シ汽船ヲ囲絶シ又種々ノ狡猾ナル術ヲ以テ

15
12

海地事務局

我輩ヲ脅ヤカサンヿヲ謀レリ又我輩ハ諸港ニ
屯集セル支那人ヲ驅リ殺シ嘗テ我ニトヒヲ為セ
ル諸村落ヲ焼夷シ又勉メテ之ヲ逐ヒ攘ハンノ
策ヲ施セリ然レトモ我兵ノ為ス所亦支那人ヲシ
テ我武ヲ怖レ又我徳ヲ敬セシムルノ術ヲ得メ
リト謂ベカラス何トナレハフヲホー港ノ事
件ノ他別ニ大戦争トヿ云フベキモノ勿ケレハナ
リ○サレバ「アルロ」牛島ヲ英ヲ屈ヲ英ルカ將対
清支ヲ屈スヿ欲且ツ八ケ月以前ノ歎訴ノ請求ハ
其理アリヤ將タ其理ナキヤ此ノ如キノ事ハ論

スルモ亦已ニ晩シ加之初メノ歎訴スラ聽キ入
レラルヽヿ極メテ望モナカリシニ更ニ又前ヨ
リハ遙カニ悪ムベク嫌フベキ種々ノ願ヲ吐出
セシハ將タ知アリヤナキカヤ今之レヲ論スルモ
益ナカルベシ蓋シ我軍埔頭ヲ離レズ十分時毎
ニ一銃ヲ発セシヨリハ寧ロ一時激烈ニ大砲ヲ
放チタランニハ廣幾クハ速ニイヽノ眠リヲ亡
マスニ足ルベシト云フハ稍安慰ノ論ナリ
右等ノ疑題ハ各皆其任ニ當ルモノヽヽヽヽニ注意
スベキ所ニシテ我敢テ議スベキ所ニアラズト

雖トモ而モ亦新タニ、ニ来レル人ハ誰皆自ラ
左ノ如キ事件ニハ眼ヲ着テ宿ルベキヨリ即チ
世ノ形勢斯ノ如クニ續キナバ恐ラクハ啻ニ我植
民地ヲ害シ我カ名聲ヲ汚シ局外中立ノ諸國
困難ヲ生ス且ツ國内各方ニ於テ我カ通商ヲ危フ
セラルヽ而已ナラズ尚ホ清国北京府トノ商議
談判ノ際大ニ困難ヲ増生スルニ至ルベシ○仏
廣東河ニ於テ我ト一戦シテ以テ其功業ヲ顕
ハサンヿヲ企ツルノ時ニ際シテ既ニ北河ニ於
テ我ニ便ナル約條ヲ商議セリトハ元ヨリ思

想ノ外ニ出テシヿナリ○他ノ源因ニ起テ上
文ノ考説ニ言憑ヲ加フル者アリ今爰ニ其序ヲ
追フテ記載スヘシ但シ予按スルニ我英人清国
ニ到来セシ前半年ニ及ヘリ其状態ヲ一目スルヲ
可ナリトス何トナレハ讀者之レニ由テ英人入
清当日ノ形況ヲ想像スルニ足リ且ハ其處置ヲ
洞見シテ知ルベキ我(ロルドイルギン)ノ寺院ニ
セシ清国人民ノ品行ト同氏其擔当勉励ノ艱難
ハ(イルギン)氏曾テ之レヲ忘念セシハナリ
○章説ク所ノ南文那ニ於テ各国不満ノ事状

アルニヨリ到底一ツハ百五十八年ノ昔ニ至リテ清国一般ノ公益ヲ英国ニ於テ得ントノ前十五年間ニ比シテ甚大ナル者爰ニ根サレタリ○

我討清ノ軍兵五千人大ニ充備ヲ齎フシ戦場ニ向テ進ミ且ツ高官将校一同船艦ニ駕シ舳艫ヲ連子其府ヲ進発シタリ○抑此時全権使節ヲ清国ニ派遣スルノ議ヲ決セシハ嘗我英国ノミニアラズ仏蘭及ヒ米皆ナ其特命使ヲ発シ此機ニ投シテ交際ノ障礙ヲ排シ公利ノ便ヲ捗メ1ヲ唱議シタリ此等ノ形状ニヨリ宇内ノ人皆

蕃地事務局

清皇國ニ注目セリトノ説アルニ至ル而シテ仁

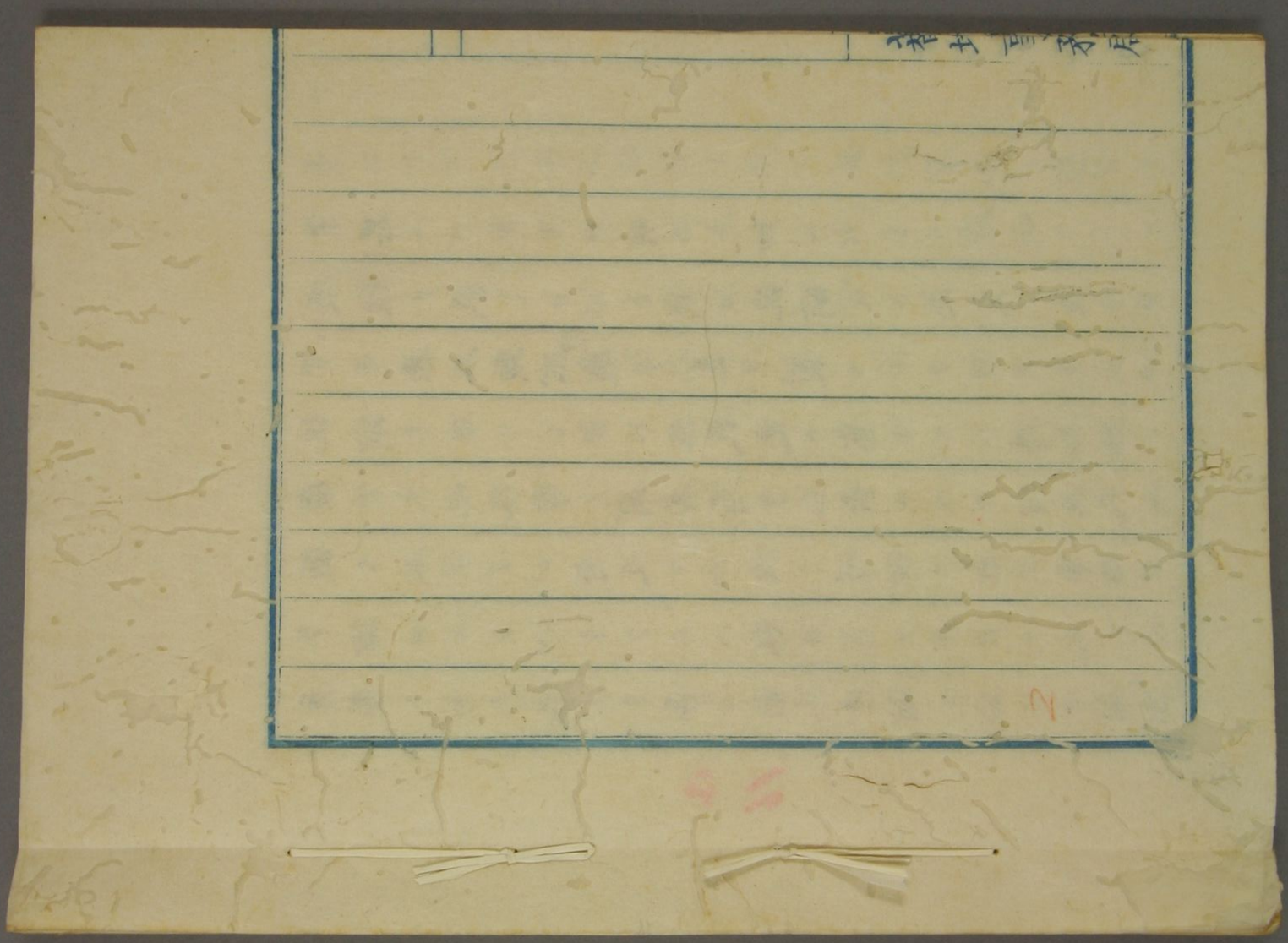
1) 英國騒動ノ待賓館ニ臨マズト雖モ然レドモ彼レ当初猶ホ声誉ヲ占メ且ツ其軍功ヲ顕ハサントト特命公使ニ随行スルノ形状アルノミナラズ尚且ツ皇帝陛下ニ従ハントスルノ形状アルハ蓋シ人ヲシテ同氏ノ品性ニ心ヲ傾カシムルニ至ルモ又タ敢テ怪ムニ足ルベカラス

最後ノ期将サニ終ラントスルノ前日即第二十一日ニ方リ欽差及ヒ海陸軍事総督谷ハンポアニ會シテ攻撃ノ場所ト假條約ノ一ノ商議

蕃地事務局

は15

セリ

第二十四日其延期終リ既ニ海陸軍ハ二進発ヲ命レタル旨同盟ノ欽差ヨリイ〻ニ報知アリロ〻ルドイルヂン所名皇帝欽差和合ヲ肯ハサリルヨリ事情改変シ隨テ英国政府ノ為メ別ニ請求ヲ追加スベキ理アル旨ヲ主張セリ其時イ〻ハ同盟ノ惣督ヨリ若四十八字間中ニ降ラズンハ速ニ此府ヲ攻撃セントスルノ企ナル旨ヲ通セラレタリ又ロルトエルテンノ急使ニ返翰スルニ支那皇帝ノ欽差ヤロ山ノ事ヲ云ヒ終ニ其形状毫モ変スルノ色ノク再ヒ前ノ手輪ニ論スル筒條ヲ論シタリハ一クスハ數日前ヨリ身ノ危キヲ顧スホンアン府及ヒ此府ノ河面ニ於テ布告ヲ廣メ大砲攻撃ノ間其府ヲ立去ルベキ旨住民ニ説諭シタリシカ住民更ニ意トセス掲札場ノ下ニ集リ顕然賊ヲ是ヲ裂セシヲ以テ見レハ後難ヲ感セサルト我カ説諭スル処交益アリト思ハザルヿハ明カニ知ルベシ

蕃地事務局